

2023 年度年次報告書

パンデミックに対してレジリエントな社会・技術基盤の構築

2022 年度採択研究代表者

山本 敬洋

シンガポール工科デザイン大学 人文社会科学クラスター
講師

本人確認の歴史とパンデミック対応への示唆:証明写真を事例として

研究成果の概要

第二年次は警察写真を中心に一次史料の分析を進めた。分析の結果明らかになったのは、警察は 1880 年代以降漸進的に写真による捜査・記録を導入していたが、そのなかで顔写真による個人識別は周縁的なものだったことである。個人識別に利用されたのは第一義的に指紋であり、写真は付属物であった。また、各都府県によって写真の普及度合いには大きな差があったし、全国統一の犯罪者写真の取扱規程ができたのは 1948 年のことであった。

入学試験はじめ各種の申請書類、運転免許証、専門職(看護師、薬剤師、理髪師など)の免状、旅券、学生証、軍人手帳などへの顔写真添付は 1890 年代から始まり普及していたが、どれも明らかな替え玉を予防する程度の効果しかなかった。写真を計量的に分析・分類する方法が無かったからである。(エラー率が社会実装に耐えうるほど低い)正確な個人識別には身体情報をデータとして管理する方法が必要であり、20 世紀前半にそれが可能だったのは指紋だけだった。この状況を一変させたのが 1970 年代以降開発され 2000 年代以降実用化された顔認識技術であり、それによって顔写真が社会で果たす役割は変容した。また顔および身体に紐づけられるデータが複雑化し膨れ上がったため、顔写真が潜在的に果たす役割(およびその社会的リスク)が大きくなった。今後のパンデミック下での本人確認も顔認識の果たす役割は大きいと予想されるが、それが機能しない状況(大規模災害、停電など)も想定した制度設計が必要であろう。

出版に関しては、論文(1)が刊行されたものの、論文(2)が投稿先に長期間放置されたため別ジャーナルへ再投稿せざるを得なくなった。論文(3)はアーカイブ調査に基づき、顔認識の最初期の事例とされる70年大阪万博のアトラクションを分析し、形態人類学と観相という2つの知的潮流がコンピューターの利用によって科学的かつ非政治的な営為として再出発を試みるさまを検討した。

【代表的な原著論文情報】

- 1) Yamamoto, Takahiro. Historicizing Personal Identification and its Implication for Pandemic Response. A Case Study of ID Photographs in Twentieth-Century Japan. *Visual History*, 25.07.2023, <https://visual-history.de/project/historicizing-personal-identification-and-its-implication-for-pandemic-response/>. DOI: <https://doi.org/10.14765/zzf.dok-2615>
- 2) Yamamoto, Takahiro. “Visualizing the ruling class in Meiji Japan: A case study of *Meiji 12 nen jinbutsu shashincho*”, Accepted for publication in *Japanese Studies*.
- 3) 山本敬洋『「顔認識」前夜：1970年大阪万博の「コンピューターの天眼鏡」をめぐって』提出済み。